別紙様式第２号

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏　　名	金　銀姫
学　位　の　種　類	博士（学術）
学　位　記　番　号	環情博甲第 329 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 26 日
学位授与の根拠	学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第４条第１項及び横浜国立大学学位規則第５条第１項
学　府・専　攻　名	環境情報学府　情報メディア環境学専攻
学位論文題目	主格・属格交替に関する比較研究 （A Comparative Study of Nominative-Genitive Conversion）
論文審査委員	主査　横浜国立大学　教授　有澤　博 横浜国立大学　教授　田村　直良 東京女子大学　教授　森　辰則 横浜国立大学　准教授　マーティン　ロジャー 横浜国立大学　准教授　藤井　友比呂 国立国語研究所　教授　ホイットマン　ジョン 岐阜大学　准教授　牧　秀樹

論文及び審査結果の要旨

本論文は、名詞句の格が主格から属格へ交替する、主格・属格交替と呼ばれる現象を扱っている。同現象は、日本語・現代朝鮮語・トルコ語について比較研究がなされてきたが、本論文は先行研究の知見を基に、新たに中期朝鮮語及び延辺朝鮮語における主格・属格交替現象について扱っている。論文の第一の成果は、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語において、現代朝鮮語と異なり、主格・属格交替が存在することの指摘である。第二の成果として、日本語に観察される主格・属格交替に対する他動性制約と呼ばれる制約が必ずしもどの言語でも見られるわけではないという発見がある。すなわち、延辺朝鮮語では日本語と同様に、他動性制約が観察されるが、反対に中期朝鮮語にはトルコ語と同様に他動性制約が存在しないことが示された。本研究の第三の成果は，以上の二点を理論的に説明する主格・属格交替および他動性制約のメカニズムの提示である。本博士論文の特長は、非常にデータ収集が難しい二つの朝鮮語を、このように記述・理論の両面からバランス良く詳細に検討できている点である。

論文構成は以下の通りである、第一章では、主格・属格交替現象について概略と理論的背景、及び研究目的を提示し、本論文で期待される成果について論じている。第二章で、日本語における主格・属格交替現象の先行文献を概括し、先行研究で示されている観察について吟味している。第三章及び第四章では、日本語と現代朝鮮語における知見を基に、写本・コーパス・現地調査・分析ソフトウェア等を用い、中期朝鮮語の名詞化現象・関係節を中心とした名詞節及び延辺朝鮮語のピッチアクセントと主格/属格との関連性を扱い、これらの言語に主格・属格交替が存在するとしている。第五章では、日本語の先行研究を基に、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の主格・属格交替現象を調べ上げ、それぞれの言語における主格・属格交替現象における特徴を明らかにし、他動性制約の有無について検証し、比較統語研究を行っている。第六章では、日本語の先行研究の知見を利用し、他動性制約を中心に、第五章で提示された中期朝鮮語・現代朝鮮語の特徴について分析している。第七章は結論である。

一連の観察及び分析から、通時的・共時的両方の視点で、延辺朝鮮語・中期朝鮮語における主格・属格交替の特徴を示し、言語間の差異を説明する主格・属格交替を可能にする格認可メカニズム及び格認可現象全般の解明に多大な貢献を行っている。既に、本論文の内容は 3 編の正論文相当である査読付き国際学会論文として公表されており、国内外で様々な発表を通じて学会でも高い評価を受けている。

以上から、本論文は博士(学術)の学位論文として十分に値すると審査委員が全員一致して認め、平成 26 年 2 月 7 日（金)、総合研究棟 2 階 201A 室において 14 時 50 分から 15 時 50 分まで博士論文公聴会を開催した。その後、同室において審査委員全員出席のもと、当該学生の博士論文最終試験を行った。

始めに当該学生より博士論文の「主格・属格交替に関する比較研究（A Comparative Study of Nominative-Genitive Conversion)」について発表があり、続いて博士論文に関連する学術論文の公表状況、大学院講義の単位取得状況などについて説明があった。

これに引き続き質疑応答を行った。審査員からは博士論文に関する質問、一般専門知識に関する質問などがあり、学力及び博士号取得資格の確認を行なった。公表論文については、正論文を相当する査読付き国際会議論文 2 編以上が採録されていることから、博士号取得の資格を充分満たしていることを確認した。外国語については、本人が国際会議において英語で発表していることから学力を確認した。また、履修単位が修了要件を満たしていることを確認した。以上により、当該学生は最終試験に合格であると、審査委員全員一致で判定した。

これに基づき、環境情報学府 情報メディア環境学専攻会議にて審議し、全員一致で本論文を博士（学術）の学位論文としての価値があるものとして環境情報学府教授会に付議することを決定した。その後、環境情報学府学務委員会での確認を経て、平成 26 年 3 月 3 日に開催された環境情報学府教授会において審議並びに無記名投票により、当該学生に博士（学術）の学位を授与することを決定したものである。

注　論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。